

# はまねこ

小川未明

青空文庫



そこは北のさびしい海岸でありました。秋も末になると、海が荒れて、風は、昼とな  
 く夜となく吹いて、岩に打ちあたつてくだけの波がほえていました。この時分になると、  
 白いかもめがどこからともなく、たくさんこの海岸に集まつてきました。そして、波の  
 上をかすめたり、岩に下りたりして、魚を捕つたのであります。

村の子供たちは、砂山の上で遊んでいました。

「はまねこが、今日は、たくさんいるなあ。」と、一人が、おどろいたように目をみはつ  
 て、沖の方を見ていました。このへんでは、白いかもめのことを、はまねこ、といつて  
 いたのです。

「沖が、荒れるんだろう。」と、ほかの子供が、いいました。

このとき、日は、もう西へはいりかけていました。遠く、その方を見ると、雲の切れめ  
 が、金色に光つて、ものすごいうちに、くずれかけた悪魔のお城のような美しさがあり  
 ました。そして、その下に、おおかみのきばのような、とがった嶺があり、もう、そこ  
 は、雪がきていて、頭が白くなつていたのであります。

「弓をこしらえて、はまねこを射ろうか？」

「はまねこなんか、とつたつて、たべられはしないや。」

「ううん、はまねこは、うまいというぜ。」

「はまねこをとると、よくないことがあるというから、だれもとらないのだよ。」

「うちのおじいさんがいった。はまねこを殺すと、海があれで、船が、難船するつて。」

「難船でない。漁がないというんだぜ。」

いつしか、子供たちは、こんなことをいつて争いました。そして、毎日のように見て

いるはまねこを、さも不思議そうにながめていたのであります。どうして、こんなことをいうのか？

この海岸の村に、つぎのような、昔、噂が伝わっていたためです。

遠い、遠い、昔のこと、ある武士が、この浜でかもめを射ました。しかし、矢は、すこ

し外れて、片方の翼を傷つけたばかりです。傷ついたかもめは、くるくると落ち葉のよ

うに空をまわりながら、漁師の家の庭さきに落ちました。ちようど網の破れめを直して

いた、人のいい漁師は、鳥が落ちてきたので、すぐ飛び出してみました。そして、だれ

か射つたのだということがわかると、

「おお、命にさわりのない傷だ。かわいそうだから、助けてやろう。」といって、その鳥

を人の目にとまらぬところに隠したのであります。そして、漁師は、知らぬ顔で、また網を直していました。

そこへ、弓を持った、武士がはいってきました。

「このあたりへ、鳥が落ちなかつたか？ たしかに、ここへ落ちたと思うが……。」と、武士がいました。

漁師は、知れたらたいへんだと思いました、あわれな鳥を助けてやりたいばかりに、「いいえ、ここへは、そんな鳥など落ちてまいません。鳥というものは、命がありますと、落ちてから、どこへか地の上をはいますものですから。」と、まことしやかに、答えました。

「はて、おかしいことがあるものだ。」と、武士は、そのままいつてしまいました。

晩方になって、もう、人に捕らわれる心配がなくなると、漁師は、鳥を逃がしてやったのであります。

この漁師のおかみさんは、永らく病気でねていました。それですから、家の中は貧しかったのです。そして、これから寒くなるのに、着る着物の仕度とてありませんでした。ある日のこと、入り口に、一人の女が立ちました。

「私は、べつに頼るところのない身でございます。ただ機を織ることだけは、だれにも負けませんから、どうかしばらくの間、置いてくださいませんか。」といって、頼んだのであります。漁師は、やさしい心の人であり、また、おかみさんもいい人でありましたから、

「じつは、女房が、機を織りかけてそのままになっているのがあるが、そんなら、それを織ってもらいましょう。」と漁師夫婦は、女の頼みをききいれました。

女は、その日から、精を出して機を織りました。家じゅうのものが、着るだけの布はじきに織ってしまいました。

「どうぞ、これから町へ売るのを織らしてください。」と、女はいつて、毎日、毎晩、機を織りました。そして、もう、冬となつて漁のできなくなつた一家を助けました。

ある日のこと、女は織物を持って、町へ売りに出かけようとする漁師に向かつて、別に、一反の織物を出して、

「この品だけは、安い値で売りになつてはいけません。あなたのお望みどおりの値に売れる品ですから。」といいました。

漁師は、それを持ってゆくと、はたして、いい値で売れました。喜んで家に帰つて、

もう一反同じものを織つてくれるように頼んだのであります。

「あの布は、私の持つてきました糸で織りましたのですが、もうあとにどれだけあるかわかりませんが、さあとにかく織つてみましょう。」といって、女は、家内の人たちが寝静まつてしまった真夜中ごろ、独り起きて、チャン、チャンと機を織つていました。

漁師は、なんだか、不思議な気がして、ふすまのすきまから、隣のへやをのぞきました。そして、びっくりしました。なぜなら、いつか逃がしてやった、はまねこが、恩を返そうと、女に化けてきて、自分の体の毛をぬき、糸にまじえて、布を織つていたからであります。

翌朝起きると、すでに気づかれたと悟つたものか、機は、織り残しのままになって、女の姿はどこへか消えて見えなかつたのでした。

それから、この村では、はまねこを捕るものがなかつたのです……。

子供たちは、この昔噺を、おじいさんや、おばあさんから聞いたことがなかつたでしょう。子供たちが遊ぶ、砂山の下には、波が、岩に打ち寄せて碎けています。そして、雪のように白いかもめが、晩方の空にたくさん飛んでいました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年11月2日

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# はまねこ

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>